

森井ふじ博士の逝去を悼む

藤永 太一郎*

理学博士の森井ふじ先生が急逝され悲しみにたえません。研究所は最も優れた海洋化学者を失いました。

森井ふじ先生は、昭和15年に塩田によらない直接的製塩法の開発のため京都帝国大学理学部分析化学研究室 石橋雅義教授の下に嘱託として来られました。終戦後は企業研究を離れ、専ら海水、海底土、海藻など幅広い海洋試料についての分析研究を続けられたので、この領域では最も熟練した教育研究者でありました。黙って試料を手渡せば主成分からトレース成分まで精密な分析値をピタッと揃えて提出されるのです。私が石橋先生の後を継ぎ講座を担当(昭和34年)すると直ちに森井先生を文部技官に任用し、海水中のアルミニウムと鉄の分布を研究するように促し、その成果によって理学博士の学位を授与されたので更に文部教官助手に任用しました。周知のようにこの2元素は海洋植物の新しい栄養素として最近注目を集めています。

丁度その頃(昭和37年)建設省が京阪神への水資源対策として琵琶湖堅田地峡にダム建設を決め、関連して研究室は湖の全面的な水質分析を行うこととなり、森井先生に担当してもらい研究室を挙げて協力する態勢を整えました。この湖沼研究は自来20年間続けられ、琵琶湖の全化学的構造が初めて明らかになるとともに、南湖から北湖への大きな逆流を見出したことが因となってダム建設自体が取りやめになりました。淀

川水系を全体として清流化する今日の本来の環境整備政策の基礎を作ったことになるこの成果は、森井先生に大きく負っているということが出来ます。このお仕事を機に森井先生は小林純教授に乞われて岡山大学に移られ、助教授を経て教授として退官、その後日本分析化学専門学校講師となり、先日まで後進の指導に当たってこられた次第です。京大26年、岡大15年、日本分析化学専門学校20年と休むことなく水圏分析化学の研究教育に尽くされて旅立たれました。

私がお一緒した京都大学時代は、教授室の隣の2号室という卒業論文研究室が先生の定位でした。殊に戦後新体制となって馴れない女子学生が入り始めると、森井先生の周辺はそれらの人達の憩いと問題解決の場となりました。先生の孤独苦節10年は珠玉の先験となって、新時代の周辺に広く大きく永く、和らぎと幸いをもたらしたのです。それは先生がたまたまそのような時間的空間的位置にあったというだけでなく、先生の希な聡明、冷静、温和といった優れた資質にもとづいていることは言うまでもありません。

最後になりましたが、森井先生のこのような恩恵を最も多く受けた者は、あるいは石橋先生と私であったかもしれません。省みて深く感謝申し上げると共に改めて心から御冥福をお祈り申し上げる次第であります。

* (財) 海洋化学研究所 名誉所長